第194回　日文研フォーラム

■

オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって

Creating the Pacific Islands
Images and Representations by Their "Discoverers"

■

ダリア・シュバンバリーテ
Dalia ŠVAMBARYTĖ

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター
所長　片倉もとこ

● テーマ ●

オセアニアの島々の イメージ形成をめぐって

Creating the Pacific Islands Images and Representations by Their "Discoverers"

● 発表者 ●

ダリア・シュバンバリーテ
Dalia ŠVAMBARYTĖ

リトアニア ビリニュス大学 講師
Lecturer, Vilnius University, Lithuania
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

2006年 9 月19日（火）

発表者紹介

ダリア・シュバンバリーテ
Dalia ŠVAMBARYTĖ
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略　歴

1992年10月　リトアニア ビリニュス大学東洋研究センター 講師
2005年４月　文学博士（ビリニュス大学）

著書・論文等

On the Chinese concept of 'Wild Words and Fancy Language'（狂言綺語）and its interpretation in Japan, *Acta Orientalia Vilnensia*, No. 5, 2005, pp. 59−69.
『老子』リトアニア語訳、改訂版、2004年、276頁
「『源氏物語』における唐代の理想」『日本文学誌要』第67号、2003年
Japonų-lietuvių kalbų hieroglifų žodynas [漢リ字典Japanese-Lithuanian Character Dictionary], Vilnius: Alma Littera, 2002, 790 pp.
大江健三郎『個人的な体験』リトアニア語訳、2001年、287頁

1　はじめに

日文研フォーラムで京都の皆様にお話しする貴重な機会をいただきとても嬉しく思っております。今日発表させていただくのは「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって」というテーマですから、「オセアニア」の定義から始めたいと思います。

オセアニアとは、大洋（大きな海）の国という意味で、大洋州ともいいます。「オセアニア」の名称が使用されたのは一八世紀以降とされていますが、一般には、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアの太平洋諸島とオーストラリア大陸の四領域の総称です。特に政治的、経済的な意味でオセアニアはこの四つの領域に限られています。しかし、『日本大百科全書』によると、オセアニアが示す範囲は一定していません。

最も広い意味では、オセアニアは太平洋上の全陸地を指しますから、日本もその地域に入っているわけです。私は今日の発表では、この広い意味でオセアニアを捉え、そして日本を中心にこの地域について考えてみます。ただし、日本がオセアニアの一部であるとは納得していただけない場合には、べつに日本を中心にしなくてもよく、ただ太平洋のもう一つの島国としてオセアニアと対照的、比較的に考えていただいたらよいと思います。

西洋による植民地化政策を前にした一八世紀前半期に、指示語として付与された「オセアニア」という名称にはもう一つの問題が潜んでいます。それは単に大洋の国という意味だけであって、太平洋以外にも大きい海があるわけですから、どの大洋を示しているのか、その海の非帰属性や非限定性を表わしてしまっています。けれども「太平洋」が地球の表面積のおよそ三分の一を占めて、世界で一番大きな海洋であるのは確かなことです。北極圏、すなわちベーリング海峡から南極圏に達し、東方では、南北アメリカの川々を呑み、西方はアジア、オーストラリア大陸の岸を洗う広大な海面です。

これまで私がよく聞かれるのは、どうして太平洋と関係のないリトアニアの人が、オセアニアに興味をもっているのかということです。実は、初めてポリネシアの神話を読んだとき、その「進化型」の開闢譚には日本の神話と多くの類似点が見出されると分りました。そして、日本にもある、島が独立した世界として創られ、生まれたという国生み、国造り、国釣りなどの創世譚は、太平洋の諸民族の神話に共通しているのです。

日本の文化は、四世紀ごろから中国・朝鮮を経由して、西域から来た大陸風の要素をたくさん取り入れ始めました。一般に、島々の住民は、海の環境に囲まれているため、大陸に住む人々には味わえない観念を数多く持っています。島国の日本でも、生活、習慣、考え方などの点で、太平洋のほかの島々の精神文化とも繋がりが深かったでしょう。

つまり、神話にある共通性は、日本とポリネシアとが何らかの直接的交流があったことを意味するよりも、島民の考え方に親近性があったことを証明しているのかも知れません。

そういえば、私が一番関心を持っているのは、いわゆる島国の思想です。私が日本語を勉強し始めたのはちょうど二十年前のことですが、その最初の日に、日本は細長い島国だということを聞きました。日本人の生活と、その生活に密着した世界観が、ほかの文化とは違う、特殊な性格であることを強調される場合に、それは島国であるから、あるいは島国の特徴であるという説明で終ることが多いのです。本当にそうなのか、その説明は簡単すぎないか、いつも疑問に思っていました。

なぜなら、島国は、島国といっても、海洋の国、つまり、海国でもあります。ところが、どうして日本は海国より島国として捉えられがちなのでしょうか。日本人自身も、鎖国の後遺症もあるのかもしれないが、日本が島国であるために、海国の意識や海洋自体への認識にあまり進化が見られない、これからの日本はもっと海の教育、海の学問を大切にしながら、海国として発展しなければならないと訴えています。日本では七月の第三月曜日は「海の日」です。それは日本の国民の祝日の一つとなっています。祝日法という国民の祝日に関する法律では、「海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁

栄を願う」ことをこの祝日の趣旨としています。なんとなく海国は前向き、プラスと考えられており、島国はマイナス思考になっています。「島国根性」コンプレックスと言ってもいいかもしれませんが、このことも日本を太平洋のほかの島国と対照させて考えたいと思います。

2　交流史から見た太平洋上の海のネットワーク

世界的にはオーストラリアより大きい陸地を大陸と呼び、グリーンランドより小さい陸地を島と呼んでいます。また同様に日本国内では四国より大きい陸地を本土、択捉島より小さい陸地を一般に島と呼んでいます。日本は、六八五二の島嶼から成り立っていますが、その大部分は太平洋圏にあります。太平洋は人類の共有財産になっていることでもあり、二一世紀は、「太平洋の時代」と呼ばれることがあります。これを機に、日本の「笹川太平洋島嶼国基金」は一九九七年から二〇〇四年まで八重山諸島において「やしの実大学」の事業を実施したのです。その大学は太平洋の島々の自然・文化・人々のことをみんなで学ぶためのクラスで、その目的は日本国内の島嶼理解を促進することにありました。つまり、「島で島を語る」ということです。

島に対して、「地の果て」「世界の果て」という島国孤立論があります。島には確かにまわりから孤立する一面もあるけれども、島だからこそ、周囲と非常に深い交流ができるという見方もあって、その見方はまた観点によって様々です。たとえば、遠流により島へ流された都人にとっては、恐らくその島は遥か海の向こうの蛮族の地、鬼が棲む国に見えたと考えられます。しかし、陸と陸を隔てている海は、自然の境界であると同時に交通路でもあって、特に国境の島々は、それを媒介にした文化の交差点として、他民族との関係の上で、特殊な観念的・国際交流上の位置を占めていたのです。

私にとっていわゆる「海のネットワーク」の象徴になっているのは、ハイビスカスの一種で、Hibiscus glaber Matsumuraという、東京都の小笠原諸島の花です。この学名には日本人の名前が入っていることから、日本人の松村氏に因んで命名されたと推測できます。ご存じのように、「東洋のガラパゴス」と言われる小笠原諸島にしかない固有種の植物が数多くありますが、この花も海岸にある「オオハマボウ」から分かれて固有種になったのです。オオハマボウは正にハイビスカスです。しかし、地元の人はこの花を「モンテンボク」と呼んでいます。それは英語の「mountain」（山）とハワイ語の「hau」（ハイビスカス）が一つになって、カタカナ日本語にされた言葉です。その命名の由来は小笠原諸島の歴史にも直接関係があるのです。

小笠原諸島は一五九三年（文禄二）、信州深志城主の孫、小笠原貞頼によって発見されたと伝えられています。当時は無人島でしたから、「発見された」という言い方はこの場合ふさわしいでしょう。明治政府によって小笠原諸島の領有が宣言されたのは一八七五年（明治八）で、翌年、国際的に日本の領土として認められました。ところが、日本人が定住する以前から来ていた先住民は、欧米系とハワイ系の移住者で、その出身地言語は英語、そしてハワイ語を主とするポリネシア語だけでなく、ミクロネシア諸語、チャモロ語、ポルトガル語など二二ヵ国語にも達していたと言い、小笠原諸島は様々な文化の混在した日本一国際的な島々でした。「モンテンボク」という名前にもそのことが反映しているのです。

日本に開拓された小笠原島から遠く離れていても、インドネシア東部地域も含む南太平洋上の島民の生活文化と日本文化との共通性として、火山列島、高床式の住宅、褌、腰蓑、入れ墨、半農半漁の生活などがあげられています。日本民族の成立論の中には南方系の民族の混血説などもあります。そして日本の「常世の国」の思想や琉球の「ニライカナイ」の水平思考が重なっていて、太平洋のほかの島国同様、日本でも稀人は海の彼方からやって来るということで、世界観としての水平軸もしくは東西軸が、島々では意識されたとよく言います。

太平洋の島々の文化を日本人として最初に研究したのは、軍人から学者になった松岡静雄です。松岡は柳田国男の弟ですが、彼が書いた『ミクロネシア民族誌』（岡書院、一九二七年）は広く読まれていて、当時の「南洋」に赴く土方久功もそれを熱心に読み込んでいたと言います。彫刻家であった土方自身はパラオ人に彫り方を教えましたが、口頭伝承の一場面を木彫にしたパラオのイタボリは、現在ではストーリーボードという名称で、おみやげとして売られています。

一方、松岡静雄の実兄、柳田国男は「島の話」で初めて島の問題を論じ、その中で沖縄諸島を踏み石とした民族の移動、漂流、文化の交流を想定しました。また、日本列島が太平洋の文化の一部となっていることにも注目して、『海上の道』（一九六一）を書きました。そこで論じられたのは、黒潮の流れに沿って、つまり「海上の道」に乗って列島へ漂着した原始日本人です。その物語の発端は、柳田が青年のときに渥美半島の伊良湖崎で椰子の実が黒潮に乗って流れ着いているのを見たことから始まっていたのだと言われています。そういえば、柳田は椰子の実を拾ったエピソードを親友の島崎藤村に語ったところ、藤村はその話を「椰子の実」という詩に作り、これが後に国民歌謡ともなりました。

古代からの沿岸航海がその範囲を拡大するにつれ、潮流のみならず「海流」が注目さ

れるようになりました。文明の伝播はその海流と大きな関係をもっています。たとえば、八丈島は古くから、エキゾチックな異文化が交流する場所でした。その理由は、いわゆる「黒潮文化」にあって、八丈島がちょうど黒潮の流れの途中に位置し、南方からの文化が流れ着く場所です。八丈島との往来が盛んになった江戸時代には、すでに強大海流である黒潮へのはっきりした認識が現れるようになりました。そして、沖縄諸島と伊豆諸島との間に指摘されている文化の類似も、「黒潮文化」説をもとに説かれています。

沖縄の人々の記憶には、南の太平洋へのあこがれも刻み込まれているのです。奄美以南に共通している海の彼方の異界「ニライカナイ」の伝説は実は、南に豊穣の神がいるという話です。そこは人間の祖霊の赴くところであって、稲や火、さらには鼠のようなものまでがその他界から人間界に持ち込まれたのです。

琉球の久高島はニライカナイにつながる聖地であり、穀物はニライカナイからこの久高島へもたらされたと伝えられています。『琉球国由来記』（一七一三年）によると、島の東海岸にある伊敷浜に流れ着いた壷の中に、五穀の種子が入っていたと記載されており、久高島は五穀発祥の地とされています。それも「黒潮文化」と関わっていますが、その伝承を事実として扱って、例の五穀が黒潮に乗って台湾かどこからか到着したと考えている学者もいます。

沖縄だけではなく、大和にも似たような伝承がありました。たとえば、『日本後紀』によれば、七九九年（延暦一八）に、小舟に乗った崑崙人が、綿の種を持って三河に漂着しました。平安京に遷都して六年目のことで、桓武天皇の時代です。翌年に朝廷が、渡来した綿の種子を、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予、土佐、九州の大宰府に送り、試植させてみたと言います。けれども、インドから直接渡来のこの種子は、どうも日本の風土には合わなかったらしく、じきに種子が絶えてしまったようです。とにかく、崑崙人漂着の話が残っていて、三河の地はいまの三河木綿の発祥元だともいうのです。

文化の交流史上、漂流、漂着、そして小舟が果した役割は大きかったと感じざるを得ません。大戦後、小船の数が減って、大型船の時代になった結果、島から島への往来がかえって島民の自由にはならなくなりました。もちろん、島から島への往来は飛行機、ヘリコプター、橋があれば車、電車など、船以外の手段で移動できる島はあります。例えば、八重山諸島の西表島と由布島の間はずっと浅瀬で、歩いて渡って行けますから、時には自動車さえも海の中を走っていますが、観光用には水牛車があります。その水牛は、戦前、台湾が日本支配下の時代に、農耕用として効率がいいので、台湾からの入植者が遥々持ち込んだのだそうです。

琉球弧と呼ぶ南西諸島に深い関わりをもった横浜市出身の文人、島尾敏雄（一九一七

～一九八六）は、文化的優位性としての大陸に固定されてきた視点を、海（太平洋）へ転換しようと考え、「ヤポネシア」という概念を考案して、戦後早くから日本および日本文化の多様性・相対性を取り上げていました。

しかし、島尾敏雄の「ヤポネシア」も柳田国男の『海上の道』も日本本土からの視点です。それに対して、八重山諸島出身の三木健は、奄美群島以南から台湾にかけて連なる島嶼圏を「オキネシア」と呼んでいます。沖縄でチャンプルーの料理がはやっていて、それは「混ざり合う」の意味ですが、三木氏によれば、「太平洋フロンティア外交」の基盤を整備している沖縄は、移民も多く受け入れ、その文化は多元的価値観を内在して、まさにチャンプルーの文化であり、海洋文化として同じ太平洋の文化圏の一つを形成しているのです。一方で、日本の文化はそれとは性質が違っているものとして捉えられており、その大きな違いは沖縄的な海洋性と、日本的な島国性にもあると考えられています。

しかし、日本にも海洋意識の証は少なからずあります。日本を海の真中にある島国、島の集合と認識した最初は、言うまでもなく、『古事記』『日本書紀』の国生み神話です。国生み神話では、「浮かべる脂の如くして水母なす漂える」状態に世界があったとき、伊邪那岐・伊邪那美の二神が、天の沼矛で海水をかき回し、矛の先からしたたる潮が積

もってできた淤能碁呂島で結婚して、日本列島の島々と神々の創造を行ったことになっています。オノゴロ島は神話上の島で、その所在については古来より諸説がありますが、古代の人々は、それを淡路島ないしはその付近の小島だと考えていました。その候補地の一つは、オノコロ神社がある沼島で、その沼島の南海上に浮かんでいる上立神岩は天地創造の営みを直接に表現していると言われているのです。

『古事記』に表現された世界の最初の状態は、「水母」のように漂っていたものですから、伊邪那岐・伊邪那美はその国を「修（をさ）め理（つく）り固め成」したわけです。日本には、渥美勝という維新思想家が明治期の終り頃に現れて、彼はその『古事記』の言葉を借りて「修理固成」を生命観にして、揺れている国を修理固成しなければならないと説きました。そして、桃太郎を日本民族の象徴にして「桃太郎」と大書した旗を立て、道を歩く人々に日本民族の世界的大使命を発揚したそうです。室町時代に成立した桃太郎の童話は、鬼ガ島が宝の島で、勇気のある者が海を遠く渡って行ってそれを征服すると、もっと花やかな国が作れるという海上征服のモデルが書き込まれていると言えるでしょう。海が日本の古代から交通路、征服路として開発されてきたことは、古くは神武天皇の東征、神功皇后の三韓征伐の神話などにも、反映されています。

日本人は昔、かなり海洋空間を動いて交流をしていたようです。古代には遣隋使・遣

唐使が大陸と往来し、戦国時代にも、堺・博多・坊津などを港として特に海外貿易が盛んでした。江戸時代にはいると、自由貿易から御朱印貿易、つまり統制貿易に切り替えられますが、御朱印船の主たる渡航地は、台湾、ルソン、ベトナム、シャムなどで、日本の船の寄港地には日本町が相次いで開かれ、繁昌しました。

3　命名の問題

ヨーロッパでは一五世紀末から一七世紀前半にかけて沿岸航海が主体でしたが、そのいわゆる大航海時代に大西洋、太平洋への航行が開始されたため、地中海からインド洋を経て東シナ海にいたる中世の海洋貿易圏が一挙に拡大し、全世界的なコミュニケーション・システムが、海を媒介として成立しました。

もともと、コロンブス以来の海洋での一連の出来事を、「地理上の発見」と呼ぶのが慣わしとなっていましたが、その後、世界史の読みかえが進むにつれて、このような捉え方はヨーロッパ中心史観に他ならないとの批判から、「大航海時代」へと改称されるにいたったことは周知の通りです。しかし、この「大航海時代」という呼び名も、「地理上の発見」よりはましかもしれませんが、やはりニュートラルすぎる側面があります。

なぜなら、西洋人の到来はオセアニアの孤立性そのものを本格的に破る事件でした。西洋側にも、十八世紀後半という西欧近代にとっての劇的変化の時代を迎えて、航海に対しては、今日の月や火星の探索衛星が無事地球に帰還した時のような、科学的な関心が向けられていました。ブーガンヴィル、クック、ラ・ペルーズの航海期になると、単なる航海ではなく、天文学者、博物学者などの科学者が同行し、画家も連れていって調査や記録の事業を進め、「発見」した島々の地形を確かめ、植物、動物の種類を調べ、住民の生活水準や習慣を調査することなどが、なにもかも一緒にして行われていたのです。

太平洋を目にした最初のヨーロッパ人は、一五一三年にパナマ地峡を東から西に旅行したスペイン人のバスコ・バルボアですが、その前はヨーロッパ人など、太平洋の存在すら知りませんでした。日本や中国の場合も、太平洋は古来「南海」もしくは「東海」「東洋」と呼ばれるだけで、そのさきに世界の果てがある、ただの海でしかなかったのです。その海が初めて形になったのは江戸時代に世界地図が輸入された頃です。江戸時代初めに地図として日本に入ってきたのは、一六〇二年にマテオ・リッチにより北京で刊行された「坤輿万国全図」です。一六三〇年代以降、マテオ・リッチのその坤輿万国全図は日本に輸入され、日本の朱子学系の地図製作者は、その後一〇〇年以上にわたって、それをもとに、いくつかの地図を作成しました。一六五二年に「万国総図」、一七〇八年

に「万国総界図」などができました。その地図の方向をみると、西向き、西北向き、北向きに分けることができますが、西向きの地図では、太平洋はかなり小さな海に見えます。

ヨーロッパ人として太平洋を初めて見たバルボアは、その未知の海を「南の海」（マール・デル・スール）と呼んだだけです。これが「南海」（サウス・シー）の語源です。この言葉は今日でも生きており、ことに北回帰線から南側、南回帰線あたりまでの太平洋をさすのです。この「南海」は、いつしか「南太平洋」とも呼ばれるようになりました。日本の場合にも、「南洋」という言い方があります。その「南洋」が特に具体的なものとして姿を現わし始めたのは日本の近代の頃ですが、公式に、地図上では、「東洋」「太平海」「太平洋」という名称もすでにありました。

この海全体を、最初に「太平洋」と名づけたのもヨーロッパ人です。一五一九年にポルトガルの航海者マゼランの一行は、インドをめざして、大西洋を渡って、南アメリカの南端を回り、太平洋の横断を果たしたのち、ミクロネシアのグアム島に到着しました。さすがに太平洋の横断には九八日も過ごしました。その間、さんざん飢えに悩まされましたが、嵐に見舞われることは、一度もなかったのです。そこで「平和な海」「静の海」（マール・パチフィコ）、つまり「太平洋」と命名したのです。実際、南太平洋は、大陸

がないことが関係しているのか、波も風も、そして諸々の気象条件も、大分穏やかです。しかし、両回帰線の外側は穏やかどころか、どんな海域よりも荒れているのです。ですから、その太平洋はほとんど同じ大きさの二つの海、つまり、南太平洋と北太平洋によく分けて論議されています。

太平洋の探検初期には、どんな島がどこにあるのかを探すのが優先目的だったので、ヨーロッパ人が島に長期滞在して島民たちと深い関わりを持つことは希でした。航海者は島々をめぐり、それらにつぎつぎと名前を与えて行きました。地名は現在、無形の文化財とされていますが、その土地にあらかじめ現地人によってつけられた名前があったかどうかは、ヨーロッパの探検者の関心事ではありませんでした。発見するとは、獲得することです。島に名前を与えることによって、航海者は、植民地づくりの競争の条件のなかで「発見」された領土に対する自国の領有権を確たるものにし、自らのヨーロッパ的教養にしたがって島々に名前を与えたりしました。それによって、未知は既知へと転じ、世界の空白は少しずつ埋められていきました。そのように我がままに与えた名前には、航海者のスポンサーや後援者に対する敬意を表したり、また、その島を発見した曜日であったり、島の形が或るものの形に似ていると思えばそのものに因んだ呼び名もありました。発見者自身の名前をとって名づけられた島々もあります。タスマニアとか、

クック諸島、ソロモン諸島のブーゲンビル島などがそうです。

例えば、ニュージーランドの場合、ヨーロッパ人として初めてこれらの島を発見したのは、オランダ人のアベル・タスマンで、彼は、最初、それがチリの南の土地だと思いました。しかし、一六四三年に、オランダ人によって改めて調査された後、そうでないと分かり、オランダの知識人はオランダの地名ゼーラント州に因み、ニュージーランド（新しい海の土地）とラテン語で名付けました。また、マオリ語の名称では「アオテアロア」ですが、「白く長い雲のたなびく地」という意味で、もともとは、北島のみを指す語でした。現在、国家の正式名称はニュージーランドでも、アオテアロアの名も使われています。また、北島のマオリ語の名前はもう一つあるようです。マオリの人びとの伝承によると、ポリネシア神話の偉大な漁師マウイは非常に大きな二つの島と多くの小さな島々を釣り上げました。このマウイの行為を称えて、その二つの大きな島に彼の名前が残されたのです。つまりニュージーランドの北島は「テ・イカオ・マアウイ」（マウイの魚）、南島は「テ・ワカ・マアウイ」（マウイのカヌー）がマオリ語の呼び方だそうです。

4　西洋航海者の文章におけるオセアニア

太平洋の島々には豊かな口承文芸がありますが、島人自らが記録したものは少ないのです。ですから、当時の島々の様子が分るのはほとんどが外国人の記述からです。オセアニアの一部が「南海」と称されたのはすでに一六世紀ですが、その「南海」の詳細が西洋に紹介されていくことになったのは、一六世紀のスペイン船や一七世紀のオランダ船の航海によるものではなく、一八世紀にブーガンヴィルやクックなどが指揮したフランスとイギリスの航海以降です。「南海」は、この地域、海域の「南」、「海」、それから大きな「空」や小さな「島」の圧倒的イメージをもって西洋の想像力をかき立てつづけたので、オセアニアは他の地域と比べて独特の「らしさ」をもって表象されてきたように思えます。

例えば、キャプテン・クックと一緒に世界一周を達成したドイツ人ゲオルク・フォルスター（一七五四～一七九四）の『世界周航記』と、フランス人ブーガンヴィルの『世界周航記』には次のような言葉があります。

この人里離れた場所に私たち三人で、二人のインディアンだけ連れて休んでいると、

思わず、魅惑的な島についてあらんかぎりの想像力を駆り立て、できるかぎりの美しい言葉で語る詩人たちの作品が思い浮かんだ。この場所は実際にもそうしたロマンティックな描写と似ているところが多々あった。もしもここに、きらきらと水晶のように光る泉や、さらさらと流れる小川でもあったなら、ホラティウスでもここ以上に気に入る隠棲の地は容易に見つけることはできなかったであろう。（ゲオルク・フォルスター『世界周航記』第十一章、上巻三六頁）

私は、何度か、二、三人連れだって、島の奥へ足を延ばした。私は、知らぬ間にエデンの園に連れて来られているのかと思った。私は、美しい果樹が影を落とし、小さな川がところどころで横切り、湿気から来る不都合はいささかもなしに心地よい涼しさを保たせている、芝草の草原を歩き回った。多人数からなる民族が、そこでは、自然が両の手一杯に注ぎかける宝物の恵みを受けている。（ブーガンヴィル『世界周航記』第二部第二章、二〇一頁）

これは科学的な情報でなく、ポリネシアの島々のロマンチックな描写です。その文章は、一七世紀のバロックから一八世紀のロココ期にかけていたるところで絵画になった

ユートピアモチーフの続きとなっていますが、このような文章では、古代ローマの詩人ホラティウスなどもよく引用されています。

一方、フランス人として最初の世界周航をなしとげ、熱帯の花木ブーゲンビレアにその名をとどめたブーガンヴィルが、その旅行記で報告するタヒチ滞在の描写は、当時のヨーロッパでたいへんな評判を呼び、ブーガンヴィル自身や彼の同行者による航海の回顧談が宮廷やサロンに伝わっていました。ヨーロッパ人にとって、タヒチは、失われた黄金時代を生きる「高貴な野蛮人」の代表的な島となりました。タヒチ人の原始生活に、堕落したヨーロッパの習俗が対置され、大革命前夜の一八世紀フランスにおける積極的文明批評の一つにまで展開しました。

一七六九年に、ブーガンヴィルに同行した植物学者のフィリベール・コメルソンが書いた「タヒチ島あるいはヌーヴェル＝シテール島の様子」という論文がさらに人々の興味をかき立てたこともありました。コメルソンの論文は、タヒチ人の社会に対する熱狂的な賛美に満ちたものであり、文明に毒されない理想郷としてタヒチ島を描き出していました。これに比べてブーガンヴィルによる島人との交流の記録は、より抑制された調子で書かれていて、より客観的にポリネシアの状態を描写しています。フランス人と島民との接触が深まるにつれて、この島の暗黒面も次第に明るみに出されてきたのです。

たとえば、ブーガンヴィルには次のような言葉が見出されます。

私は、先に、タヒチ島の住民が、我々には、うらやむに価する幸福の内に生きているように見えると言った。我々は、彼らが、彼らの間でほとんど平等であり、あるいは少なくとも全員の幸福のために作られた掟にしか従わない自由を享受しているものと信じた。私は間違っていた。タヒチでは、身分の区別はたいへん顕著で、不平等はたいへん厳しいものである。（ブーガンヴィル『世界周航記』第二部第三章、一三〇頁）

5　江戸時代の漂流記とオセアニア表象

太平洋地域の当時の記述は、日本人によるものも残っています。それは漂流記です。海上交通が未発達で、船による目的のある長い航行も不可能であった時代には、民族の移動や文化の伝播には、漂流の果たした役割が大きかったのです。漂流者が最初の探検者で開拓者でもあった場合は少なくありません。日本人の写真で最も古いものは、幕末の漂流者の写真です。一八五一年にアメリカ船によって太平洋で救助された漂流者が、その船上で撮影されてできたものです。

日本の江戸時代に漂流が特に多いのは、鎖国とともに造船術も航海術も西欧の進歩から遅れたことで、弁才船（千石船）という江戸時代の和船には構造上の欠陥があり、その弁才船は嵐に遭遇すると、ほとんどが舵をやられ、帆柱も失ったからです。舵と帆柱を失った船は、海流と風に任せて漂流するほかありません。海流にのって漂い流れた漂着先は、太平洋周辺に限られたものの、非常に広範囲にわたっています。記録に残っているかぎり、朝鮮、琉球、台湾、中国、ロシアはもちろんですが、南の方はミクロネシア、東南アジアのルソン、ミンダナオ島、ベトナムなどがあって、日本をとりまく全地域に及んでいます。また、漂着した場所に限定せず漂流民が行動した地域も含めると、アメリカ、メキシコなどから、ポリネシア、ヨーロッパの内部、カナリア諸島にまで至っています。

救助された日本人の漂流民のうち、多くは清国に送られた後、長崎に帰着しました。鎖国下では、不可抗力の漂流であっても生還者は一応国禁を犯した犯罪者とされ、長崎の奉行所で取り調べられ、その都度、訊問調書がとられたのです。調書とは別に、第三者の聞き手が漂流民の体験談に加えて、異国の風俗などのスケッチをまとめて「漂流記」と総称されるものに作り上げることもありました。江戸時代の漂流記は、基本的に記録そのものですから、事実に基づいており、装飾を加えられることはほとんどありません。

ですから、そうした漂流記にあるオセアニアの表象は、ヨーロッパで形成されたイメージとはかなり違います。

ポリネシアを見た最初の日本人のことを調べてみると、それは津太夫をはじめとする四人の漂流民であると分りました。彼らは日本人として初めて世界一周を果たした人物でもあります。もともと仙台藩の出身で、一七九三年に嵐のためロシア領に漂着しました。それからシベリアを経てロシア各地をめぐった末に、サンクト・ペテルブルグに到着しました。そこでロシアの皇帝に謁見して、帰国を許されました。津太夫ら四人はロシア初の世界周航を企てた船ナデジダ号に便乗してデンマーク、イギリス、カナリア島、ブラジル、マルケサス島、ハワイ、カムチャツカを経て、一八〇四年に長崎に帰着しました。

津太夫らの体験談を記録したのは蘭学者大槻玄沢ですが、その漂流記は『環海異聞』と言います。ところが、質問する側にいかに大学者を揃えても、答える側は学問のない船乗りでしたから、玄沢はかれらの言葉の不足は絵で補おうというわけで、絵画の上手なものを伴い、津太夫らに問い質しながら大略を描かせるという方法も講じました。

この『環海異聞』に、ポリネシアに関する非常に興味深い挿絵があります。たとえば、津太夫らの陳述では、マルケサスのカヌーは大蛇の形に作られていました。挿絵は確か

にそのように描かれていますが、はなはだ誇張して蛇の形に似せているとも言えます。そして、津太夫たちは、マルケサス人の印象を「鬼人の如し」と言い、それはロシア人乗組員たちの語っていることでもあると述べていますが、挿絵を見ると、やはり津太夫たち自身の印象でもあったことにまちがいありません。

一方、提督クルーゼンシュテルンなどのロシア人は、帰国して書いた旅行記にマルケサス諸島の女性の美しさを賞讃し、マルケサスの島民を、南海のどの島民よりも色も形も美しいと思うようになった、と述べていますが、津太夫らには「其顔色逞しく」という以外に、何の感想もないのです。ヨーロッパ人と日本人の美意識の違いもあったかもしれませんが、『環海異聞』はまず事実の記載だけで、評価や感想のたぐいがきわめて乏しいのです。

『環海異聞』の挿絵における人物は、基本的に男女一人ずつの対で表わされています。そのモデルになったのは漂流民の言による描写よりも、長崎で一六四五年（正保二）に出版された「万国人物図」や「世界人物図巻」の男女図だと考えられます。この「万国人物図」のオランダ人とか「世界人物図巻」のギニア人を見ると、漂流民が見たハワイ人と基本的に変わらない描き方です。その演出家はもちろん、「学問のない」漂流民ではなく、編者の大槻玄沢です。蘭学者ですら、まさにヨーロッパの航海者と同じように、

実際の見識を深めさせようというより、自国ですでに形成されたイメージをその民族の描写に書き込んでいたのです。

6　オセアニアのイメージにおける自己と他者

ヨーロッパには、航海者だけでなく、民間人の中にも、事実を無視した南海のイメージを形づくる傾向がいつもありました。例えば、バリ島に関しては、「芸術の島」や「神々の島」といった表象は、一九二〇～一九三〇年代のバリ島に滞在していた芸術家や人類学者たちによって演出されたものだと主張されています。しかし、芸術家と太平洋の島々との関係を一番よく代表している人物はもちろん、フランスの後期印象派の名匠、ポール・ゴーギャン（一八四八～一九〇三）です。タヒチ、マルケサス諸島の自然と人々を主題とする彼の作品群は、タヒチそのものを象徴するようになりました。ところが、タヒチにあるゴーギャン記念館には、「日本人ゴーギャン」と名付けられたコレクションがあります。そのコレクションは、日本の浮世絵とゴーギャンが描いた絵の複製を二枚一組にして展示しているのです。印象派の画家たちが日本の浮世絵から強い影響を受けたことは周知の通りです。ゴーギャンも例外ではありません。彼は日本の浮世絵を題材

にその情景、構図を模倣したので、そのタヒチの絵画の背景に日本の風景や日本人の姿が刻み込まれているとも言えるでしょう。

このような実例があって、ヨーロッパでは、「西洋的なまなざしによって他者を文化的に植民地化する」とか「他者との距離から自己を塗り固める」とか「それによって自己認識の鏡像をつくる」といった議論がよくされますが、それは、複雑な事態を簡略化しすぎる議論です。ゴーギャン自身は他者、他者性と非常に緊張した関係をもっていたらしく、また、古代ローマの詩人ホラティウスもしくはヴェルギリウスを引用しながら自分の航海記に虚構を書き込んだフォルスターやブーガンヴィルも、「いい匂いの花」とか「水晶の鏡のように輝いているたくさんの小川」などについて書いたりしていますが、それだけを書いているわけではありません。彼らの文章には科学的な観察もあるし、ポリネシア社会の分析などもあります。しかし、読者の記憶に一番深くとどまったのは、やはり彼らの本とか絵に描写されていた太平洋の島々の理想郷的なイメージでしょう。それらのイメージは、結局は独り歩きを始めて、今なお「太平洋の魅惑的な島イコール楽園」というイメージを形成しつづけています。

イメージ形成は、時代により変化する場合があります。日本におけるミクロネシアのイメージにもそれぞれの時代背景の特色があります。一八七〇年代からの士族授産金制

度の時代が終った後、「南進論」が次第に具体化してきました。その一環として日本政府は海軍練習艦に民間人を便乗させ、ミクロネシアを紹介しようという計画を企てました。明治十一年から二十年前半にかけて、多くの民間人がオーストラリア、ハワイ、フィジー、サモア、ミクロネシア、フィリピンを訪問しました。第一次世界大戦中から、日本による南洋群島支配が始まりましたが、一九二二年以降の表象は南洋庁を中心として生み出されたものです。一九三三年に日本が国際連盟を脱退すると、時局はまた変化しました。当時活躍した中島敦は自らの南洋文学を通して、日本人の複雑かつ矛盾に満ちた帝国のまなざしを明らかにしています。「真昼」という作品では、彼が扮する日本人の語り手は、自身の南洋イメージの起源を追求し、自らの視点の「脱植民地化」を試みています。

第二次世界大戦後、ミクロネシアは「激戦の跡」や「日本軍のゼロ戦や軍艦が沈む海」などが存在する場所として、つまり戦争の記憶を媒介に表象されるようになりました。ガダルカナル島の戦いなどに参加したアメリカの元兵士たちにとっても、ソロモン諸島は同じような意味をもっており、現地のガイドはそうした意識を利用して、戦跡ツアーなども行なっています。

しかし、最近になって、ミクロネシアなどの太平洋地域は世界的に「無国籍」な姿と

して描き出されるようになり、それを表現しているイメージは安定化して、その内容が時代にほとんど左右されなくなったと言えるでしょう。太平洋の島々は観光地オセアニアになりました。

7　観光地オセアニアの開発

観光とはビジュアルなこと、視覚に関する事業で、商品化できるイメージと密接に繋がっています。観光地オセアニアの宣伝物は、熱帯地方の絵葉書のように、土地・人間・風俗に感動し、楽しもうという感覚で作成されています。それでは、太平洋の島国の政府観光局の公式ウェブサイトを参考にして、それぞれの政府がどのように自国のイメージを形づくっているのか、見てみましょう。

ミクロネシア連邦政府観光局公式サイトは、自国を次のように紹介しています。

ミクロネシア連邦は、太平洋西部に位置し、赤道のすぐ上を東西約二五〇〇キロにわたって広がるヤップ・チューク・ポンペイおよびコスラエの四州と六〇七の小さな島々（居住しているのは六五島のみ）からなる連邦国家です。私たちはここを「四つ

の楽園」と呼んでいます。それは、ヤップをはじめとする四つの州は、アクアマリンのラグーンとエメラルド色の水道、生物の宝庫のマングローブ林、緑豊かな熱帯のジャングル、霧に包まれた山々、壮大な滝、謎に満ちた古代遺跡など、それぞれ表情の違う魅力に満ちあふれているからです。　http://www.visit-micronesia.fm/index_j.htm

ここに出ている修飾語は、ミクロネシアの壮大さ、豪華さ、神秘さ、美しさを強調し、色合いとしては青と緑が多く見られます。また、サイトの次のページに行くと、「魅惑の群島」という熟語が出てきて、ミクロネシア、そしてミクロネシアへの旅行は「薬」と匹敵させられ、ミクロネシア連邦のそれぞれの州のユニークさが、適当な限定詞によって強調されています。「石貨と伝説の島、ヤップ」、「ダイバー憧れのチューク」、「ガーデンアイランド、ポンペイ」、「ミクロネシアの宝石、コスラエ」です。「島」「アイランド」という単語を頻繁に利用して観光宣伝を行っています。「島」だけではなく、「宝」のイメージも反復して登場します。「宝石」「宝庫」などです。

メラネシアの場合、フィジー政府観光局のホームページでは、フィジーは「笑顔の楽園」そして「青い魅惑の島々」として紹介され、またスキップできるイントロに、「自分たちだけの楽園を探しに、南太平洋フィジーへ」「どこまでも青く澄み渡る空と海」「ホ

スピタリティあふれる陽気な島の人々との出会い」などの文が、次々に現れてきます。青色、楽園、魅惑、島、明るさなどの言葉がセットになっているのです。

ポリネシアのサモアも、「南海の楽園」として紹介され、その中のナムア島は「西欧化を避けてポリネシア文化を頑固に守るサモア」であり、「最後の楽園」です。一方、サモア観光局のスローガンは数年前に、「ポリネシアの心」から「南太平洋の宝島」に変わりました。以前はサモアがポリネシアの起源で、ポリネシア文化のオリジナルはすべてサモアであるということでしたが、最近になって、そのスケールはポリネシアを越えて南太平洋全地域にまで拡大され、サモアはすべての「南海」の楽園の中心として、ポリネシアだけの文化遺産ではないファイヤーダンス、カヴァ儀式などもサモアが独占しようとしているかのようです。一方、「心」よりも「宝」「宝島」のイメージが優先するようになりました。

サモアの場合、「宝島」はまた別の意味を持っていると思われます。それは、サモアの人々から「ツシタラ」、つまり「語り部」と呼ばれたロバート・ルイス・スティーブンソン（一八五〇～一八九四）の長編小説『宝島』に由来することは明らかです。南太平洋を渡り歩き、サモアにその墓があるスティーブンソンは、南太平洋でシンボリックな存在になり、作家としてだけでなく、南太平洋を舞台にした文学作品の主人公にもな

っているのです。例えば、中島敦の『光と風と夢』という小説は、スティーヴンソンの南洋生活記の体裁をとっていますが、原題も『ツシタラの死』でした。

「宝島」としてのサモアの起源には、スティーブンソンの小説『宝島』があるわけです。しかし、太平洋にはもうひとつの宝島があります。その島は「ニッポン」です。これは日本の国土交通省観光企画課の公式サイトに載っているＰＲで、その説明を読むと、日本は、もともと魅力的な観光資源の宝庫だと言っています。けれども、いままでその「宝」の紹介が不十分であったことから、国土交通省は、「観光宝探し」をスローガンに掲げ、全国から身の回りの魅力的な観光資源の大募集をキャンペーンしたと書いています。ただし、日本の場合はその土地に暮らす人々の参加を促して、身近な「宝」を見つけ出して楽しもうというのに対して、サモアなどの場合には、「国が宝物」に抽象化され、売り物にされているところに大きな違いを見出すことができます。

8　島国に現れる国土観

楽園は場所的な概念だけでなく、時間的な概念でもあります。オセアニアの唯一の大陸であるオーストラリアの政府観光局は、オーストラリアを「時を超えている国」とし

て紹介し、そこで私たちを待っているのは「果てしなく続くビーチ」「活気溢れる都市」、「古代の文化を語り継ぐ物語」「大自然の不思議」などとPRしています。しかし、そのオーストラリアは、大航海時代にポルトガル人やオランダ人にすでにその存在が知られていたにもかかわらず、西北部の砂漠を見て、当時はだれもそこを植民地にしたいとは思わなかったほど厳しい環境に見えました。キャプテン・クックが、気候もよく水も十分な東南部の海岸に上陸した後、初めてオーストラリアが移住できそうな土地だということが分かったのです。他方、四万年以上も前からオーストラリアに土着した原住民は従来、住みにくい地帯で遊牧民の生活を送る部族がほとんどだ、というのが通説だったようですが、実はそうではなく、その多くは昔、環境にもっと恵まれている海岸沿岸部に集中していました。しかし、ヨーロッパ人の上陸以来、沿岸部の原住民は壊滅的な打撃を受けましたから、現在、内陸地帯の居住者となって、その不毛の乾燥地あるいは砂漠で固有文化を維持し続けているのです。

日本列島も同じように、人類学的、文明史的に当然海の影響を受けていますが、その領域の八六パーセントは山岳地であって、むしろ直接には海と接しなかった人々の方が、多数を占めていたはずですから、元来は陸地の島国として認識されていて、山国のイメージが強いようです。しかも、日本には、「本土」「内地」があるのに対して、周辺の島

嶼があり、それらは異質なものとして捉えられています。日本人は、伝統的に本州・四国・九州を、海に浮かんでいる「シマ」とも考えてこなかったらしく、青函トンネルで結ばれる以前から、北海道をも島嶼とは考えていなかったのです。明治期に地方制度の上で、島嶼は日本本土と比べて「人情風俗」が違うという根拠で、例外地としての枠づけを行う措置がとられたのです。社会構造的にも、日本の国家はほぼ一貫して「海人」、海・漁業の民を「外れ者」の形にしていました。日本の和歌には、農耕民はほとんど歌われず、海人がよくうたわれるのも、海人が異人だったからです。

「神風の伊勢の国は常世の波の寄する国」ともよく詠まれていましたが、これは海のかなたに常世があり、そこの霊威が波によって寄せられて来るという意味です。上代人は、海神の宮ないしは竜宮、また、根の国、底つ国という、死者の霊の赴く一種の理想郷を、水平線の彼方、または海底に想像していたのです。海は水平線まで続き、波は常に沖から寄せて来るので、浜に漂着した物も神からの授かり物として拾われていました。そのような浜や磯で釣りをしたり、藻を拾ったり、塩を焼いたりしていたのは、正に特殊な者としての海人です。

一方、日本語の「シマ」はかつて常人の暮らしの依り所で、「取りつく島がない」との言い方などには、頼りや助けとなる主体としての「シマ」の古い意味が残っています。

日本語の「シマ」の普通の意味は、「周囲を水で囲まれた大小の陸地」ですが、古くは、水域に孤立した地形でなくとも、「シマ」とよばれました。半島はもちろんですが、海や水に縁のない内陸部においても、そこがひとまとまりの景観を示す場合は、「シマ」でした。しかし、時代が下がるにつれて、島崎藤村の詩「椰子の実」の「名も知らぬ遠き島より」というように、「シマ」に離島・孤島・海の彼方の含意が強められてきて、「島流し・島送り」の観念が生じました。異郷の語感も「島」につきまとってきました。日本には五島の三井楽のような、愛する人が死んで、その霊魂の飛び去るところがあったりします。中国の伝説の中の蓬莱の観念も、日本にそのまま採り入れられたのは、海と天とを一つに考えようとして、遠くにある島は、死んだ人が行く現世と未来、夢と現の境界の地、そして見えない世界、つまり、死の国として想像されたからでしょう。

9　太平洋の島々の島嶼性

島の地域的特性は、「島嶼性 insularity」と呼ばれていますが、これが最初に論議されたのは、生物学の分野においてです。人間社会における島嶼性については、人文地理学者や民俗学者たちが研究していますが、ほとんどの学者が島のすべてに共通するような

社会的特性の存在を強く否定しています。島自体もすべて同じ地域性を持っているものではなく、その種類は、小さな島と大きな島、沿岸の島と離れ島、内海の島と外海の島、孤島と群島など様々です。島嶼群の中でも、日本がその一例であるように、中心部と周辺部があり、多くの島嶼国家においては、主島または本島への人口集中化がすすみ、属島では過疎化が進行しています。それに対して離島では、国防の要衝、世界交通の焦点、新文化の栄えた所が歴史的に多かったのです。しかし、本島、属島、離島にかかわらず、島嶼はいずれも洋上にまとまりをもっているもので、その共通した特色として、小規模性、弱者性、狭小性などを挙げる学者がいます。

そのような文脈においては、「島国」という言葉は、負の感情を内包しています。広辞苑によれば、「島国」は「四方を海に囲まれた国」、そして「海国」です。つまり、島国と海国とは同じ意味であると言えます。しかし、「海国」という言葉にはネガティブなイメージはなにも含まれていないのに、「島国的」という言い方には明らかにマイナス面があって、島国に特有な様として、細事にこだわり、他国との交渉が少ないため視野が狭い様と説明されたりします。また、「海国根性」という言葉はないのに、「島国根性」という日本語があります。「根性」はもともと「性質」、「気質」、「精神」「意志の力」「闘志」「頑張り」という意味ですが、必ずしも悪い意味ではありません。けれども、使

い方として「根性の腐った」、「根性の曲がった」、「根性の悪い」「あの男には根性がない」とよくない意味に使うことが多いのです。「島国根性」もよくない意味で、文化論的には、島国に住む住民にありがちな、視野が狭く閉鎖的で、こせこせした性質を意味しています。

島国のイギリスの人々が偏狭さを「島国」の主たる特徴とする点では日本人と似ていますが、その島国的な「偏狭」な物事の捉え方、考え方、姿勢こそが彼らの国民性であるとまで考えてきました。たとえば、一八八〇年に『ブラックウッド・マガジン』は「不寛容な島国根性や他者蔑視が、イギリス人の顕著な国民性のひとつである」と書いています。

海洋の国として誇りをもっている沖縄でも、島国の劣等感に苦しまないわけではありません。沖縄本島は細長いから、高台に登ればどこからでも海が見えるわけです。しかし、那覇には識名園という琉球独自の庭園があります。この識名園は中国皇帝の使者である冊封使を歓迎した場所にも利用されていましたが、識名園の展望台は海が一切見えない沖縄の唯一の場所です。南部方向にはどこまでも大地が続き、琉球が大きな国であると思わせるような大陸的風景となっています。もちろん、琉球人に戦略的な知恵もありましたが、やはり海に囲まれた小さな「島国」感から脱出したいという意識も潜んで

いたのではないかと私には思われます。

ヘーゲルによれば、土地が人間を縛り有限の世界にとどめ置く限界は、海によって突破されるといいます。海の与える無制限、また無限の観念に刺激された人間は、有限の世界を乗り越えようと、未知の太平洋にも航海に出ていきました。地図を見ると、太平洋は、間違いなく海洋の世界です。しかし、太平洋の特徴とは、陸と陸を隔てる海の大きさだけでなく、逆に何より世界の他地域との歴史的・地理的な隔絶性を極めた陸地の小ささにもあります。

ミクロネシアのサタワル島の人びとは、天上世界、地上世界、海底下世界という三つの世界の存在を信じ、その地上世界は「海」と「島」で成り立っていると信じていました。その二つに分けられた領土ですが、ミクロネシアでは、島は女性の働き場が多い領土で、海は男性の働く領土になっているのです。その海の領土を支配していた男性たちは、太陽、月、星座などの天体現象や、雲、風、潮の流れなどの気象、海洋現象、さらには魚やクジラ、海鳥などの生物現象、あるいは漂流物などの情報を巧みに利用して優れた航海術を編み出してきました。ところが、海によって微細な陸地に隔てられた島の人々は、沿岸漁業など陸地を中心にした活動をして生きる傾向が、男性の中にも強くあります。大消費市場から遠く隔てられ、港も整備されず、技術の改良、資本の蓄積に不

利で、交通も不便な島では、漁業の発達は困難で、遅れがちであったので、島社会は交通、交易の非広域性だけでなく、孤立的な自給性も極端な形で内在するのです。

日本の離島でも、昔から、産業の中心は、水産業でなく、牧畜や畑作などの農業でした。西日本を中心に一部存在した家船や海女、海士を除けば、生粋の海上生活者の数は多いとは言えず、沿岸や島嶼部に住む人々でも実際には海に背を向けてわずかな土地を耕し、サツマイモと麦で暮らしを支えるという生活が従来、比較的に多かったのです。

日本では海に対する信仰も山の信仰に比べると具体性に乏しいようです。漁民の信仰生活などを見ても、えびすなどの漁業神や船霊などの船の守護神については、ほぼ全国的に具体性をもって語られていましたが、海そのものに対する信仰や儀礼は、そうとも言えないのです。「板子一枚、下は地獄」という船乗りや漁師の言葉がありますが、それは、海上での生活がどれほど多くの制約や危険を伴うのかをよく表しています。柳田国男の言葉を借りれば、昔、大航海を決心した太平洋の人々は、新たな島を発見し、その自然を馴らし、安住することになると、天はますます遠く高くなり、導く神は留まって護る神となったのです。

ポリネシアのいわゆる「三角形」の頂点の一つをなすイースター島には、ホツマツア王の伝説があります。ヒバという国に住んでいたホツマツア王が、その故郷が天災に会

い、新しい永住の地を探していた際に、ハウマカという占い師がマナの力で眠っている間に魂だけでイースター島までやってきてこの島を発見しました。目がさめてからヒバの王にそれを伝えましたが、王様は早速七人の使者を島へ送り出しました。イースター島に最初に入植したその七人の航海者を記念して立てられたのは「アフ・アキビ」というモアイ像です。そのモアイ像は、彼らがやってきた春分と秋分の日の沈む方向にある故郷を見ているのだと言います。しかし、モアイ像が内陸に立って海を向いている場所は、このアフ・アキビしかありません。イースター島の海岸沿いにモアイ像がたくさん立っていますが、そのほとんどは海を背に、島内の方向、つまり内陸の村のほうを見守っているのです。

10　終わりに

海は陸地に比べて危険性が高く、そこから得る海の幸もまた、自然の諸条件によって大きく左右されるのです。一方、島では、農耕は台風や水不足などによって不安定なもので、資金、資源の不足などが顕著にあらわれる特徴があり、環海性、空間的な隔絶性、閉鎖性、小規模性、依存性などを特色にすることが多いのです。

それにもかかわらず、西洋人と出会った日本も、「南海」の島々も、「西洋」という「他者」によって本質的な魅力、魔力、引力を持っている自然体としてなかば強制的に立ち上がらされたのです。マルコ・ポーロの『東方見聞録』により「黄金の国ジパング」が西洋に紹介されて以来、日本は途方もない金の富める国として世界中の熱い視線を浴びて来ました。それに対して太平洋の島々の多くは、ヨーロッパ人によって一六～一七世紀に「発見」され、その位置が地図に書き込まれたにもかかわらず、経済的な興味を引くものは少なく、住民との実質的な接触が始まったのは、一九世紀半ばに捕鯨が盛んに行われた頃からです。西洋人が太平洋の島々に対して「発見」から植民地化、そして植民地化から支配体制の整備へと至る過程を経て、太平洋の隔離されたミクロ・コスモスとしてのオセアニアの島々のイメージや知識を作り上げていきました。

その「南海」におけるユートピア思想を生んできたのは近代西欧の産業社会やオリエンタリズムです。ポリネシアなどは、古代ギリシャの比喩をもって、近代西洋の汚れや欺瞞を暴露しながら神の祝福、人間の真実の開示をもたらす地として描かれたことで、西洋の文化や思想に大きなインパクトを及ぼしました。さらにはハリウッドの商業映画、メディア産業などがエロティックな一面を持つ島々の表象、「美しき楽園」の幻想を膨らませていきました。

太平洋の島嶼は、大陸から切り離され、交通、通信が不便なために、新文化の流入が遅れ、古風な民俗が豊かに残されていました。しかし、ヨーロッパ人が到来して以来、太平洋の島々は伝統的な自給自足経済から交換経済に移行するのにともなって、島民の衣・食・住が変化しました。とりわけ孤立・隔絶した島嶼にあってはその変化は短期間に急激であったはずです。その結果、多くの島からは伝統文化が相当消滅しています。ところが、旅行ガイドブックなどを読むと、伝統的に根をおろしたイメージが今でも働きかけているのだと分かります。一方、日常生活で言えば、その太平洋の島々において、海が後ろに引いて、陸地に道を譲っているものの、観光地オセアニアには、海に力点を置いたエコツーリズムが未だに強く推進されていて、観光宣伝のために利用されているイメージにも海が大きな役割を果たしています。

要するに、西洋に押し付けられた幻想は現在でも著しい働きを演じていて、太平洋の地域自体を変えていくのです。しかも、西洋とオセアニアの相互関係の中に生まれてパターン化したそれらの幻想は、四方八方に行き渡ってイメージのネットワークとしても展開しつつあります。そのイメージを受容したオセアニアの政府観光局はそれらを観光客のニーズに合わせて調節しているのです。現代のその観光宣伝を西洋の大航海時代の旅行記と比べると、太平洋のユートピアの表象は保存されているけれども、そこに教訓

的な側面が欠けていることが明らかになります。旅行は「楽しむ」ものですから、西洋の「汚れ」対オセアニアの「純潔」という「二項対立」が放棄されてしまって、残っているのは、島々を売り物にしようという機能を十分に満たしているヤシの木陰で踊る島人、澄みわたる大空、白い砂浜や紺碧の海です。

参考文献

相賀徹夫編集著作『日本大百科全書・4』小学館、一九八五年。

赤祖父哲二、川合康三ほか全7名編『日・中・英言語文化事典』マクミラン　ランゲージハウス、二〇〇〇年、八〇九～八一一頁。

ブーガンヴィル『世界周航記』（中川久定ほか編『17・18世紀大旅行記叢書』第2巻）山本淳一訳、岩波書店、一九九〇年。

ゲオルク・フォルスター『世界周航記上・下』（中川久定、二宮敬、増田義郎編『17・18世紀大旅行記叢書』第Ⅱ期第7、8巻）三島憲一、山本尤訳、岩波書店、二〇〇三年。

後藤明『ハワイ・南太平洋の神話―海と太陽、そして虹のメッセージ』中公新書、一

九九七年。
石川榮吉『日本人のオセアニア発見』平凡社、一九九二年。
印東道子編著『エリア・スタディーズ—ミクロネシアを知るための58章』明石書店、二〇〇五年。
春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』世界思想社、一九九九年。
片山一道『ポリネシア海と空のはざまで』東京大学出版会、一九九七年。
小松和彦「南洋に渡った壮士・森小弁——『南洋諸島』以前の日本・ミクロネシア交流史の一断面」篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房、二〇〇一年。
クック『太平洋探検上・下』(中川久定、二宮敬、増田義郎編『17・18世紀大旅行記叢書』第三、四巻)増田義郎訳、岩波書店、一九九二年。
松村武雄編『オーストラリア・ポリネシアの神話伝説』(『世界神話伝説体系21』)名著普及会、一九八九年。
長嶋俊介、仲田成徳、斎藤潤、河田真智子『島・日本編』講談社、二〇〇四年。
新村出編『広辞苑第5版CD-ROM版』岩波書店、一九九八年。
Kazuo Z. Ninomiya. "A View of the Outside World during Tokugawa Japan: An Analysis of Reports of Travel by Castaways, 1636 to 1856". Ph.D. dissertation, University of

Washington, 1972.
西敦子「明治政府の島嶼政策」『日本史研究』五二七号、二〇〇六年。
大林太良（著者代表）『海から見た日本文化』（『海と列島文化』第十巻）小学館、一九九二年。
千住一「ミクロネシアおよび南洋群島表象の歴史的変遷」日本島嶼学会『島嶼研究』三号、二〇〇二年。
Robert Tierney. "The Colonial Eyeglasses of Nakajima Atsushi". Japan Review 17 (2005), pp. 149-196.
山下恒夫再編『江戸漂流記総集：石井研堂これくしょん』日本評論社、一九九二年。
柳田国男「島々の話」『柳田国男全集』第十九巻、筑摩書房、一九九九年。
由比濱省吾訳『マオリの神話と伝説』由比濱省吾発行、一九九六年。

参照サイト：
http://www.spto.org/
http://www.visit-micronesia.fm/index_j.htm
http://www.bulafiji-jp.com/

http://www.visitsamoa.ws/japanese/

http://www.kanko-otakara.jp/jp/index.html

http://www.happyplanetindex.org/list.htm

http://www.vanuatutourism.com/

http://www.australia.com/home_jp.aust?JSESSIONID=FFgkpmcq!-1194822031&L=ja&C=JP&Z=1157963940671-1014359335

発表を終えて

長年にわたって、源氏物語に専念した私は、平安時代と唐代文学の比較研究をしていました。しかし、平安京を擁する京都の日文研に来た時、初めて大陸文化から、太平洋の海域に目を向け、「源氏」の世界と関わりのない、また光源氏と出会えそうもない島嶼を研究するようになりました。場所ずれだと強く感じました。

ところが、山があれば川ができ、その川にそって海に出ますから、山に囲まれた京都は、「海のネットワーク」と繋がりが全くないわけではありません。今年の春、国際交流を目的とする加茂川会というボランティアのグループに、「石野味噌」という老舗を訪ねる機会を与えていただきました。その際、京都の白味噌のことを色々と知ることができ、白味噌を食べる風習が残ってきた地域がどこにあるかを、教えてもらいました。それは近畿地方から岡山、広島、香川に渡った、即ち、平家の都落ちのルート上の地域です。京都名産の白味噌が沿岸に沿って瀬戸内海の広い地域に伝わってきたということです。

その瀬戸内海を航行する船の目印になった讃岐の象頭山では、海難や海上交通の守り神としての金毘羅が信仰されています。ところが、そこはいつしか、保元の乱に敗れて京都から讃岐へ流され崩じられた崇徳上皇もあわせ祀るようになりました。京都市内にも、金比羅さんが一つでき、崇徳天皇はその鎮守として祀られているのです。その安井金比羅宮は、釣り人やマリンスポーツを楽しむ方の信仰を集めていると言います。

枯山水が生まれたのも、京都です。枯山水は、白砂と石組で大海に浮かぶ神仙三島など、つまり、水を使わずにシンボリックな水や島々の世界を表現する都の様式です。その都から、西方浄土を指して魂を送り届ける精霊船は、京都の夕闇の海に消えていく五山送り火の「船形」です。

京都の日文研滞在は、充実した研究生活が送ることができて、忘れられない一年となりました。多大なご協力、ご指導をくださった日文研の皆様、また、京都で知り合ってお世話になった方々に心から厚く御礼を申し上げたいと思います。

D. Šrap

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩1	9.11.11 (1997)	KIM Uchang 金　禹昌（高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク Carl MOSK（ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ Jan SYKORA（カレル大学助教授・日文研客員助教授） Kinya TSURUTA 鶴田　欣也 （ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
⑩2	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ（龍谷大学助教授） 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜　信杓 （仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
⑩4	10. 2.10	GAO Wenhan 高　文漢（山東大学教授・日文研客員教授） 「中世禅林の異端者—一休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER（筑波大学教授） 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9	Hiroshi SHIMAZAKI 島崎　博（レスブリッジ大学教授・日文研客員教授） 「化粧の文化地理」

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘　培培（バッサー大学助教授・日文研来訪研究員） 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER（チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授） 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA （カイロ大学講師・日文研客員助教授） 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・　　トキタ Alison McQUEEN-TOKITA （モナシュ大学助教授・日文研客員助教授） 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK （シェフィールド大学教授・東京大学客員教授） 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜　勤 （華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第２学部副学部長・日文研客員助教授） 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH （ボストン大学助教授・日文研客員助教授） 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON （ハーバード大学教授・日文研客員教授） 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER （オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授） 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM　Ji Kyun 金　知見（韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授） 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑳	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子　滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
㉑	11. 9. 7	SONG Min 宋　敏（韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授） 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
㉒	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
㉓	11.11.16	ヴラディスラブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリャード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
㉔	11.12.14	X. Jie YANG 楊　暁捷（カルガリー大学準教授・日文研客員助教授） 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
㉕	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA（日文研中核的研究機関研究員） 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
㉖	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李　応寿（世宗大学校副教授・日文研客員助教授） 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレーンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
㉘	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金　貞禮（国立全南大学校副教授・日文研客員助教授） 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⓪	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD （県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授） 「出島―長崎―日本―世界　憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン（1867―1944）と倉場富三郎（1871―1945）」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH （ソフィア大学助教授・日文研客員助教授） 「お盆と正教の五旬祭―比較的なアプローチ―」
⑬②	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI（日文研外来研究員） 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「読み書きできなかったのは誰か―明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛　容泰 （東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授） 「日本語の『カゲ（光・蔭）』外―日本文化のルーツを探る―」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡　敦達 （同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授） 「中国文人が観た明治日本―旅行記を読む―」
⑬⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS（日文研中核的研究機関研究員） 「長者の山―近世的経営の日欧比較―」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER （ヴァージニア大学教授・日文研客員教授） 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10	LI Zhuo 李　卓（南開大学教授・日文研客員教授） 「中日姓名の比較について―親族の血縁性と社会性―」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY （フランクフルト大学教授・日文研客員教授） 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⓪	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐　蘇斌（日文研外国人研究員） 「中国現代建築の成立基盤―留日建築家・趙冬日と人民大会堂―」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, Ⅱ （コロンビア大学教授　日文研外国人研究員） 「忠臣蔵再考―四十七士の三百年―」
⑭⓪	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE（日文研外来研究員） 「聖人伝、高僧伝と社会事業―古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に―」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN （ハワイ大学準教授・日文研客員助教授） 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官　文娜（日文研外国人研究員） 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ　キムラ　スティーブン Chigusa KIMURA-STEVEN （ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員） 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申　昌浩（日文研中核的研究機関研究員） 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑦	14. 2.12	マシミリアーノ　トマシ Massimiliano TOMASI （ウェスタン　ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員） 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭　惠卿 （世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員） 「日韓言語文化の比較―語る文化と語らぬ文化―」
149	14. 4. 9	マッシュー　フィリップ　マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY （ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員） 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法―三条本を中心に―」

⑮⓪	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李　光濬 （東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員） 「禅心理学的生命観」
⑮①	14. 6.11	LU Yi 魯　　義 （中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員） 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア　ボ　ロ Alexia BORO （イタリア　カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員） 「建物と権力―明治初期の東京の建築について」
⑮③	14. 9.10	YEE Milim 李　美林 （日文研外国人研究員） 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴―日韓比較―」
154	14.10. 8	マルクス　リュッターマン Markus RÜTTERMANN （日文研外国人研究員） 「伝授から伝統へ―中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮⑤	14.11. 5	KIM Moon Gil 金　文吉 （韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員） 「神代文字と日本キリスト教―国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS （米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員） 「問題化された身体―明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL （米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員） 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顚末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦　暁梅 （日文研研究機関研究員） 「隠逸山水に秘められた『近代』―富岡鉄斎を読む―」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA （米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員） 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑯⓪	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツィゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑯⑤	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑯⑥	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響－家族改革をめぐって－」
167	15.12. 9	エフゲーニー S. バクシェエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑯⑨	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑰⓪	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王　述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑰①	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 ： サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色　音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李　漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑰⑦	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ… 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑰⑧	17. 3. 8	WU Yongmei 呉　咏梅 (北京日本学研究センター専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通— 中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって —」
⑰⑨	17. 4.12	ノエル ジョン ピニングトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池　明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マクマレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑱2	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭　在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯　成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラプチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字－古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本言語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈－なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュー ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く－肉体表現と流光斎－」
188	18. 2.21	ウィリアム パック ブレッカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ－江戸時代の郊外における美学的スペース－」
189	18. 3.14	サーレ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話－日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐって－」

⑲⓪	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金　容儀 （全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員） 「玄界灘を渡った鬼のイメージ－なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか－」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔　博光 （成均館大学校教授・日文研外国人研究員） 「京都と文化表象－18世紀朝鮮通信使の目から－」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉　春英 （東北師範大学助教授・日文研外国人研究員） 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
⑲③	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周　維宏 （北京日本学研究センター教授・日文研外国人研究員） 「近代化による農村の変貌とその捉え方について－中日農村を比較して－」
⑲④	18. 9.19	ダリア　シュバンバリーテ Dalia ŠVAMBARYTĖ （リトアニア ビリニュス大学講師・日文研外国人研究員） 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって」
⑲⑤	18.10.10	エドウィーナ　パーマー Edwina PALMER （カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員） 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」－高等教育の社会科カリキュラムを中心に－」
196	18.11.14	ヨセフ　キブルツ Josef A. KYBURZ （フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員） 「お札（ふだ）が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート　エスキルドセン Robert ESKILDSEN （日文研外国人研究員） 「異国船物語―江戸後期に描かれた船―」
198	19. 1.16 (2007)	プラット　アブラハム　ジョージ Pullattu Abraham GEORGE （ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員） 「日印関係とインドにおける日本研究―宮沢賢治の菜食主義の思想―」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

＊＊＊＊＊＊＊

発 行 日　2007年２月１日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

＊＊＊＊＊＊＊

©2007　国際日本文化研究センター

■ 日時

2006年 9 月19日（火）

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

キャンパスプラザ京都

第一九四回　オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって

ダリア・シュバンバリーテ

国際日本文化研究センター